

日本地名研究所通信



第109号

二〇二五年
四月二三日発行

〒213-0001 神奈川県川崎市高津区溝口二―六―一〇 川崎市生活文化会館4F ☎〇四四―八二二―一一〇六 〇四四―八二二―一一九一

E-mail: chimeiken@chimei.people.co.jp http://chimei.people.co.jp/



金田宅のさくら 2025年3月29日 撮影：吉田俊雄氏

二つの地名―新年度に向けて

日本地名研究所 所長 金田久璋

年度末から、わが家の前庭の桜が満開を迎えている。寒の戻りと言うより花冷えという季語にふさわしい季節が、ようやくおとずれていく。区内から移転新築して、早や三五年。もともと田圃だったので約一反(三〇〇坪)の敷地の前庭に、ひかん桜、数珠掛桜、枝垂れ桜4本があり順次満開となる。当地は福井県三方郡美浜町佐田。小字は「川向」と呼ばれ、河岸段丘の金瀬川左岸にあり、かつての役場所在地の中心地からすればまさしく川の向いにあたる。

ところで「佐田」は小地名として全国にも点在するが、当地の場合は実は公称地名で、通称は「織田(おった)」とふだんは呼ばれてきた。中世の荘園時代にゆかりを持つ氏神は織田神社(織田神社、おりたじんじゃ)と呼ばれているから、その鎮座地にちなむと考えられる。すなわち、当地は珍しく二つの地名を有する地区で、伝承によれば、織田八郎と佐田次郎という土豪の親子にちなむとされ、織田八郎は末社の八幡神社の祭神にもされている。令和三年に佐田伝統文化保存会で「佐田の七不思議」を制定する際に「二つの名前を持つ村」として、そ

の地名伝説をとりあげることにした。古代にまでさかのぼれないが、地名の重層性を考えさせる一資料である。

さて、今年の第四回全国地名研究者大会は十一月十五日、一六日に「アイヌ語地名」を研究大会の基本テーマとして、三たび岩手県遠野市で開催されるが、出来れば「本州アイヌ」に関わる蝦夷やアイヌ語地名への関心が深まればと考えている。ちなみに、若狭のわが住居地が、縄文後期にすでにあり、その後の渡来文化との重層性、複合性が地名に刻まれていることが予想されている。目下、上野公園の国立科学博物館で「古代DNA―日本人の来た道」が開催されているが、地名にも古代DNAが潜んでいるかも知れないではないか。

柳田国男生誕百五十年・伊能嘉矩没後百年記念

第四四回 全国地名研究者 遠野・三陸

アイヌ語地名研究大会への誘いいざなひ

小田富英

すでにお知らせの通り、今秋十一月一五、一六日の両日、遠野で開催される全国地名研究者大会は、「アイヌ語地名」に焦点をあてた大会となります。伊賀大会終了後、札幌の「アイヌ語地名研究会」、釧路の「釧路地方の地名を考える会」、宮城の「東北アイヌ語地名研究会」、神戸に拠点をおく「アイヌ語地名懇親会」の皆さんと、大会内容や二日目のエクスカーションなど

について検討してきました。また、記念講演についても、谷川健一初代所長時代から、長い間、本研究所の活動を支援していただいていた北海道大学名誉教授の小野有五さんをお願いすることができ、すでにご快諾を得ています。さらに、『地名と風土』編集委員会の席上、「アイヌ語地名」の話題だけでなく、東北の地で活躍している方の実践的な話も聞いてみたいという希望が出され、お二人の報告を盛り込むことができました。

二日目のエクスカーションは、今現在計画中ですが、解散地は概ね変更はないかと思えます。柳田国男生誕百五十年・伊能嘉矩没後百年の節目の年の最後を飾る大会となります。ぜひ、今から予定のなかに入れて楽しみにお待ちください。

大会内容と宿泊申し込み、その他のお知らせ事項は以下の通りです。

第四四回全国地名研究者 遠野・三陸 アイヌ語地名研究大会
大会テーマ 「アイヌ語地名から探る暮らしと文化」

日時 二〇二五年十一月一五日（土）、一六日（日）

主催 日本地名研究所

共催 遠野市・アイヌ語地名研究会・釧路地方の地名を考える会

会・東北アイヌ語地名研究会・アイヌ語地名懇親会

後援 川崎市・遠野市教育委員会・遠野市文化振興財団、遠

野文化研究センター・遠野市観光協会・富川屋

第一日目 開会 一〇時

あえりあ遠野 中ホール

〒028-0524 遠野市新町1-10

開会挨拶、来賓挨拶

基調講演 遠野における「郷土研究」のあゆみ

—伊能嘉矩・柳田国男・萩野馨を結ぶ— 小田富英

記念講演 「新しいアイヌ学」のすすめ

—知里幸恵の夢をもとめて— 小野有五

研究報告、実践発表

異界・遠野で「ししになる」

富川 岳

伊能嘉矩とアイヌ語地名

小林絃一

(東北アイヌ語地名研究会)

地名が語る悠久の暮らしと文化

藤村久和

(アイヌ語地名研究会)

「ムックリ」の演奏

川上さやか (同)

岩手でのライフビュー・地域医療・人生会議の取り組み

—高齢者の生きる希望の再発見—

杉山賢明

私の身近なアイヌ語地名と人々

佐藤壽子

(釧路地方の地名を考える会)

安土城の「あづち」について

大木紀通

(アイヌ語地名懇親会)

終了後、日本地名研究所総会

懇親会 六時から八時

あえりあ遠野 交流ホール

第二日目 エクスカーション 大まかな予定です。

Aコース 遠野・花巻コース 大償—小付内—久出内—早

池峰神社—折壁—斯波町—音部—新花巻解散

Bコース 住田・陸前高田コース 世田米—高田—小友—

陸前高田博物館、復興祈念公園—長部—気仙—

一関解散

Cコース 遠野・来内伊豆神社コース 遠野博物館、物語

の館—伊豆神社—鍋田など—神遺神社—遠野駅

解散

今後の予定 七月 大会リーフレット、ポスターなど作成後、

参加申し込みを受付けます。申し込み前に宿の予約をし

てください

参加申し込み前の連絡事項

1. 宿泊申し込みは、各自にてお願いします。大会会場の

「あえりあ遠野」に宿泊できますと、移動に便利です。

本通信到着後、あえりあ遠野(〇一九八—六〇—一七〇〇)

に電話し、「一ヶ月の地名研究者大会に参加する者」と名乗

って、希望の宿泊日を言ってください。団体割引の特別料

金(一泊朝食付、八千円)で可能です。(二人以上の部屋

を一人で利用する場合は例外です。六人部屋の和室を五人

で利用する場合も特別料金となります。)それ以外の宿泊

施設については、各自でお探してください。民宿などもおす

めです。団体でのご利用は、郊外の「たかむろ水光園」

もあります。詳しいことは、観光協会にお電話して下さい。

2. エクスカーションの解散地は、あくまでも四月初め段階の

予定です。エクスカーションにかかわる参加費、昼食費な

どもコースにより変わってきますので、お含みおきくださ

い。

柳田国男生誕一五〇年記念シンポジウム

日本地名研究所 事務局 菊地恒雄

令和七年（二〇二五）三月八日（土）に早稲田大学戸山キャンパスで、柳田国男生誕一五〇年記念シンポジウムが開催された。

今回の催し開催にあたって、準備会から日本地名研究所に共催の依頼があった。『柳田国男全集』編集委員で、日本地名研究所『地名と風土』の編集長でもある小田富英さんが実行委員を勤めている。そのような関係で、日本地名研究所を立ち上げた第一回全国地名研究者大会（一九八二年）の大会テーマが「柳田国男没後二十周年記念シンポジウム―柳田学の継承と展開」が開催された。多彩な立場の方々が参加したことも、大きな反響を得た大会であったという。

また、『地名と風土』第九号（二〇一五年）では、「柳田民俗学と地名研究」をテーマに、柳田国男が提唱した地域を見る目や文化を通して地名の関りを論じている。近年、各地の地名研究会で柳田国男の『地名の研究』を輪読して学習会を開くなど、我々にとっては現在にその考えや生き方を知る存在である。このようなことから記念シンポジウムの共催を承諾した。

シンポジウム当日は生憎の雪交じりの寒い日であったが、主催者の予想に反して、一三〇名を超える参加者で会場はいっぱいであった。講師も日頃聞くことのできない様々な分野からの講演で、個人的感想であるが、久しぶりに大学の講義を聞いた気分であった。

テーマは「柳田学の現代的意義を考える」で、主催者の一人である早稲田大学教授の鶴見太郎さんが趣旨説明を行い、それぞれの節目に柳田国男の顕彰がなされているが、これからの五〇年に柳田学がどう捉えられていくべきなのか、今回の講師陣からの話をもとに深めていきたいと挨拶があり、招待講演として評論家の黒川創さんが「変化に対する姿勢」と題して講演した。研究報告を四名の方々が行った。

笠井賢紀（慶應義塾大学法学部准教授）は「柳田国男を手掛かりに地域社会と向き合ってみる」

中山正典（遠州常民文化懇話会）は「柳田国男を読みながら遠州の民俗を記録する―遠州常民文化懇話会と後藤総一郎―」

田澤晴子（岐阜大学教育学部教授）は「柳田国男と竹内好」
佐藤健二（東京大学副学長・東京大学未来ビジョン研究センター特任教授）は「明治大正史 世相篇」の実験

その後、鶴見太郎さんがコーディネーターを務めて、相互に意見交換と会場からの質問に対しての答弁が行われた。

話題となったのは、日本地名研究所『地名と風土』編集委員でもある笠井さんの経験談から始まった、とりあえず柳田国男を知り、いかに興味を持ち深めていくこと。そして、柳田国男の生き方と領域にこだわらないことこそ、現代化の重要な要素と考える。中山さんの常民文化の考えも、柳田国男の著作を読み、主体的に学ぶことが会の活動の中心に据えている。柳田国男の「国語論」のように、言語にまで広がっていることにもっと注目するべきだという意見も出た。

日本地名研究所会員が関東地域を中心に二一名参加したことも付け加えておく。今回は編集子はお休みします。